

令和2年度 はばたき学習（総合的な学習の時間）実践・研究計画

部 員	○佐々木 雅巳 椎名 美穂子 福田 佳子 伊藤 敏幸 高橋 裕和
-----	----------------------------------

研究テーマ

自ら見いだした課題を、よりよい解決方法を用いて探究し、対象の本質に迫る子どもを育む学び

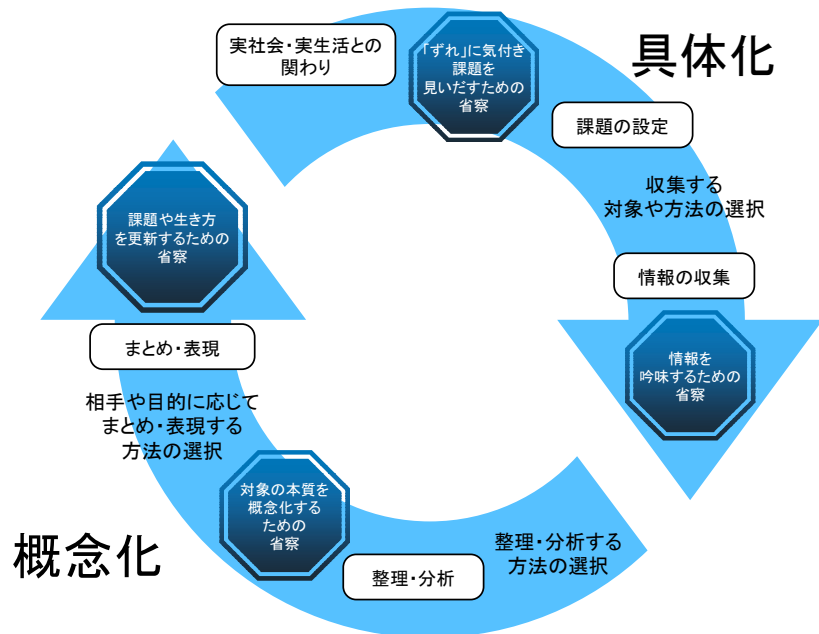
1 研究テーマについて

はばたき学習部では、研究主題の「自律した学習者」を、「実生活や実社会の中から課題を見だし、よりよい解決に向けて主体的・協働的に学習に取り組む子ども」と捉えた。そして、研究副題「学びをつなぎ資質・能力を高める」を受け、はばたき学習における「学びをつなぎ、資質・能力を高めていく子どもの姿」を次のように捉えた。

- ① 「人・もの・こと」と関わりながら、予想や理想などと現実との「ずれ」に気づき、自ら課題を見いだしていく姿
- ② 探究的な学習の過程において、よりよい解決方法を考えたり、選択したりしながら主体的・協働的に課題の解決を目指していく姿
- ③ 対象や解決方法について学んだことを自分の言葉で意味付け、次なる学びに活かす姿

このような子どもの姿を目指し設定したのが、はばたき学習部の研究テーマ「自ら見いだした課題を、よりよい解決方法を用いて探究し、対象の本質に迫る子どもを育む学び」である。前段の「自ら見いだした課題を」とは、上記①の子どもの姿を、後段の「よりよい解決方法を用いて探究し、対象の本質に迫る」の部分は、②③の姿を想定したものである。

2年次の実践では、探究的な学習の過程に、個人的な省察と、シミュレーションを基にした協働的な省察を位置付けることで、よりよい課題解決に迫る子どもの姿が見られた。しかし、子ども一人一人が状況や自分に合った適切な方法を自覚的に用いながら、課題解決に取り組むという点では課題が残った。こうした課題を踏まえ、3年次も本研究テーマに継続して取り組んでいく。



はばたき学習における自律した学習者の学習過程を示したものが上の図である。はばたき学習では、子ども自ら課題を設定し、子ども自身が課題解決の目的や意義を明確に捉えていることが欠かせない。そのためには、これまで抱いていた学習対象となる「人・もの・こと」に対する考えや理想と、実社会や実生活と直接関わり合う中で現実との「ずれ」を自覚できるよう工夫する必要がある。そして、対象との出会いから子どもが課題を見だし、解決方法や手順を考えていく過程で、自ら選択し、判断していく場面を保障することが重要である。

探究的な学習の過程においては、自らの知識や技能、様々な学習で身に付けてきた「見方・考え方」等を総合的に働かせながら、情報を収集・吟味したり、整理・分析したりする姿が望まれる。その際に大切になってくるのは、他者と協働して課題を解決しようとする態度である。多様な他者と双方向の交流を行い、フィードバックを得ることで、多様な情報を活用したり、異なる視点から考えたりする力を育んでいく。

このような「人・もの・こと」と関わり合いながら探究的な学習を進める中で子どもは、自分にとって対象がもつ意味を具体的に見いだしたり、学んだことの価値を考え直し概念化を図ったりする場面に直面するであろう。探究を通して、自分にとっての答えとしての概念をつくり直したり、自らの考えや生き方を見つめ直したりする活動こそ総合的な学習の時間特有の省察である。

実社会や実生活から自ら課題を見だし、自ら選択した方法を用いて探究していく中で、物事の本質に迫ろうとする子どもの姿を目指して、実践・研究を進めていく。

2 研究の重点

(1) 探究的な学習の過程で用いる「見方・考え方」を選択し、自覚的に用いる力を高める学習活動の設定

「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」といった一連の探究的な学習過程で、目的や自分に合った「見方・考え方」を選択し、用いていく活動を重視し単元を構成していく。

そのためには、課題の見つけ方、目的に応じた情報の集め方や調べ方、整理・分析の仕方、まとめ方や表現の仕方、報告や発表・討論の仕方などを考える場面で、適切な選択肢を示したり、試しに使ってみたりする活動を位置付けることが重要となる。各教科等の学習経験を想起しながら、多様な「見方・考え方」を友だちや教師と共に実際に使ってみる中で、課題や自分に合った方法を、子ども一人一人がじっくりと時間をかけて見いだすことができるように、単元を構成していく。

(2) 探究的な学習過程の質を高める効果的な省察の場を位置付けた単元構成の工夫

2年次の実践では、探究的な学習過程における効果的な省察として、以下の四つが見いだされた。

- ・ 予想や理想と現実との「ずれ」に気づき課題を見いだすための省察
- ・ 多様な方法で収集した中から必要な情報を吟味するための省察
- ・ 整理・分析しながら対象の本質を概念化するための省察
- ・ 学びの成果を踏まえて課題や生き方を更新するための省察

これら四つの省察の場面では、対象や他者との「対話」から得られたフィードバックをもとに、そこから得た気づきを自分の言葉で意味付け、概念化し、更新していく活動を重視する。多様な視点や方法を用いて対象や学習過程について考えることにより、新たな気づきやよりよい解決方法を見いだすことができるものと考えられる。

3 研究・研修計画

時 期	主な研究・研修行事	研究・研修内容
1 学期	・ はばたき学習部会	・ 実践・研究計画，年間指導計画作成
2 学期	・ はばたき学習部会	・ 実践・研究についての情報交換 ・ 授業を通しての重点事項の検証
3 学期	・ はばたき学習部会 ・ 部内研究会	・ 授業を通しての研究の方向性の確認 ・ 実践記録・研究計画案の作成